一去十三年

東京大学名誉教授（元第2部教授）　高橋幸伯

昭和60年3月に，38年間（第二工学部時代を含めて）勤めた生産技術研究所を辞めてから，いつの間にか13年が経ってしまった．

中国東晋の詩人陶淵明（365～427）の「園田の居に帰る」という詩を最近知ったが，この長詩の冒頭に，

少きより俗に適うの韻なく，性本邱山を愛す．
誤って塵網の中に落ち，一たび去って十三年．
羈鳥は旧林を恋い，池魚は故淵を思う．
荒を南野の際に開かんとし，拙を守って田園に帰る．

という8句がある．大意は，「若い頃から私は世間と調子を合わせることができず，生来自然を愛する心が強かった．ところがふと誤って埃にまみれた世俗の網に落ち込んでしまい，あっという間に13年の年月が経ってしまった．篭の鳥はもと棲んでいた林を恋い，池の魚はもとの淵を慕うと言われているが，私も，世渡りの下手な性格をあくまでも守り通して故郷の村に帰ってきて，村の南端の荒れを開墾することにした．」というようなところらしい．

転々とした下級官吏の生活に嫌気がさして，淵明は41才のとき官を辞して田舎に帰り，翌年にこの詩を作ったそうで，有名な「歸去來兮辭（ききょらいのじ）」も同じ年の作らしい．詩の中の「十三年」というのは淵明が宮仕えをしていた年数で，私の場合は退官してからの年数であるが，「一去十三年」という言葉が，現在の私の心境にも共鳴するような気がしている．

陶淵明については，これまで田園詩人または酒飲み詩人という印象しか持っていなかったが，最近いろいろ他の作品を読んでみると，時事を風刺したもの，感慨を吐露したもの，哲理を説いたものなど，実に幅広い分野に及んでいることを知って驚いている．当時日本は古墳時代で，神功皇后や応神天皇の時代に当たるらしいが，まだ文字も無いに近い状態ではなかったかと思われる．中国では，すでにこれだけの文学や哲学が存在したかと思うと，歴史の重みの違いを痛感させられる．

私は，東京大学退官後も，四つの大学で常勤や非常勤の教官を70才まで勤め，実質49（延べ67）年の教官生活を送ったことになる．淵明流に言えば，生産技術研究所の歴史と同じく「一去五十年」と言ってもよさそうである．現在公務としては，海難審判庁の参審員を拝命しているだけである．私の場合は，船舶の欠陥に起因するかと思われる海難事故に限って参加する非常勤の審判官であるが，最近この種の海難事故は極めてまれで，私の出番は滅多に無く，大体我が家でほぼ晴耕雨読に近い毎日を送っている．

さて，淵明の詩の中の「俗に適うの韻無く，性もと丘山を愛す．」という性格は，私にもよく似ているところがあるような気がするが，「誤って塵網の中に落ち」というのは，私には当たっていないと思われる．もし行政官吏であったとすれば，そういう感じを持つ場合があったかもしれないが，過去50年間に籍を置いた大学は，いずれも私にとっては望みうる最高の職場で，これほど外部からの拘束の少ない有難い職場は，他所では望めなかったであろうと感謝している．その代わりに，各人の自主的な能力と才覚と責任が期待されていたわけであるが，私がそれに十分応え得たかどうかとなるといささか心許ない．

造船の分野では特にその傾向が強かったが，工学や科学技術部門の開発研究では，関係する各方面の総力を結集した大型のプロジェクトとなることが普通で，大学の者には，そういうグループを統括指導するまとめ役を期待されることが多かった．私も委員長とか部会長とかの役を数多く引き受けてきたが，最適任であったかどうか疑問なものもあったような気がする．いずれの場合も私なりに一所懸命努力して，一応合格点は頂けたものと思っているが，研究開発の場では，一応合格という程度では本当は駄目で，何か目覚ましく突出したものがなければ，誉めて貰うわけには行かない．私が代表者となったプロジェクトでは，特に目覚ましいものはあまり無かったように反省している．

私には，独りでこつこつやるような仕事の方が向いていて，グループの先頭で勇ましく旗を振ったり，人の尻を叩いたり鼻面を引回したりするのは，適任ではなかったと自覚している．1,500年も前の先輩の「拙を守る」という言葉に，特に共鳴を感じているこの頃である．私には帰るべき園田はないけれども，脳を病んだ妻を看護りながら，狭い庭で好きな土いじりでもして，拙を守り通して行こうと思っている．